

紫「何が始まるんです？」アサギ「大惨事大戦よ」

お胸が平の清盛

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

時は、AD2079 11月……

対魔忍の里で繰り広げられる五車決戦の半日前……。

町民の避難が済んだ五車町に存在する五車学園で、それは起きてしまった。

五車決戦に備え、五車町を包囲するは過去の五車町にて権威を振りかざしていた井河長老衆に加え、その残党たち。

加えて対魔忍に対して個人的に恨みのある者までもが、この五車決戦に参加していた。

井河アサギ率いる現五車町の対魔忍達は、その多大なる忍魔混合部隊によって追い詰められ、窮地に立たされていた。

そこで、苦渋の決断として井河アサギは独立遊撃部隊隊長の『ふうま小太郎』が、未来の対魔忍たちとの邂逅に用いている機材を使い、平行世界線への救援依頼を頼んだのだが……。

〜一方その頃……

収監を終えて家路へ向かうふうま小太郎達。

疲れからか、不幸にも黒塗りの高級車に追突してしまう。

後輩をかばいすべての責任を負ったアサギに対し、

(かつての)五車の主、井河長老衆、井河 扇舟が言い渡した投降の条件とは……。

☆1000文字小説です。評価をください。

目次

## 対魔忍野郎Aチーム！

時間は有限だ。

でも私は五車襲撃まで12時間を切っているにも拘わらず、騒々しい会議室の隣の教室で、椅子に座り両肘を机の上に立て両手を口元で組むことしかできなかつた。

隣では緊張した面構えの八津 紫が、なんと言葉を掛けるべきかと戸惑っている。

現在。この部屋には私達2人を除いて他の教師はいない。彼女達は今、隣の部屋へ寿司詰めになっている来訪者達の対応に追われている。

来訪者<sup>彼等</sup>は敵ではない。

彼等は、この世界線。五車町の窮地を救うために平行世界から送られてきた対魔忍達だ。

五車学園に勤めている魔人化可能な歴史科の女教師。

蜘蛛を操る五車学園中等部の対魔忍。

整った顔立ちだが雪女のような容姿に、幼さの残る口調の対魔忍。

黒色ロングコートの中に米連の軍用装備に加え、足にM93Rを装備したガスマスク姿の対魔忍。

単独行動を好む、赤胴色対魔忍スーツと簡易装甲・両腕に2門の砲門を装備した対魔忍。

見た目こそ普通で私服の少年のように見えるが、ジャンパーの裏に武器や腹部には対魔忍の里で用いられる巻物が巻きつけられた対魔忍。

臃に似た濁った瞳にマフラーで口元を隠す対魔忍。

私と同年代の約180cmもの高身長で水城不知火と並ぶ巨乳を持つ歴戦の対魔忍。

……あの場の誰かのパンツを食べる対魔忍。

その他にも居るがここでは省く。

更に恐らく対魔忍ではない者も混じっている。

髑髏仮面の騎士や雨合羽<sup>レインコート</sup>のような装備で身体をすっぽりと覆い隠

した性別不明の傭兵。消火器持参の一般人だとか、うるさい冷蔵庫だとか。

おまけに『秋山 凜子』の弟だと名乗る対魔忍までいる。……7人ぐらい。

全員同じ顔で『秋山 達郎』だと名乗った時は、笑うしかなかった。いずれも皆、実力があつてあの場にいる。私達を助けるために、平

行世界からやって来てくれたことは理解している。しかし、これから起きる五車決戦での壮絶な激闘がどうなるかだなんてことは……。

「アサギ様、何が始まるんです?」

そう……紫の問いに私の答えは決まっていた。

「大惨事大戦よ」

—井河 扇舟サイド—

「扇舟様。アサギの軍勢は人手が足りないと判断したのか、傭兵をかき集めているようです」

「ふふふ……敵は追い詰められているってことね。余所から何人雑兵を集めようと所詮は烏合の衆。作戦は変えず、今夜2時に強襲を仕掛けるわ」

「はっ!」

「井河アサギ、お母様の無念。ここで晴らさせてもらおう……!」